文京学院大学 News Release

共に育つ、わくわく悩む。

報道関係者各位

2022 年 12 月 27 日

オピニオンレター Vol.33を発行

心理学から見る、令和の若者の結婚観
未婚率の増加が止まらないワケ

文京学院大学（学長：櫻井隆）は、発達心理学、家族心理学が専門の人間学部永久ひさ子教授が提言した、オピニオンレターVol.33「心理学から見る、令和の若者の結婚観 未婚率の増加が止まらないワケ」を発行したことをお知らせいたします。

オピニオンレター概要

本学では、教員陣の最先端の研究から社会に還元すべき情報を「オピニオンレター」として発行しています。この度発行するVol.33では、心理学という観点から見た、未婚者の結婚観や結婚行動の変化について、最新の調査結果をもとに紹介します。

令和元年の平均初婚年齢は男性31.2歳、女性29.6歳に上昇し「一生結婚するつもりはない」未婚者（18～34歳）の割合は、男性17.3%、女性14.6%と、過去最高に達しています*。「結婚してもしなくても、どちらでもいい」と考える若者が増えており、いまや、結婚「する」「しない」は個人の選択で、生き方の問題として捉えられるようになっています。

そこで本レターでは、こうした未婚者の結婚観や結婚行動の変化と、その背景にある社会環境とライフスタイルとのねじれについて、最新の調査結果をもとに心理学の観点から分析します。

〇オピニオンレター

https://www.bgu.ac.jp/about/activity/opinion_letter/

*人口統計資料集・2021年・国立社会保障・人口問題研究所

文京学院大学

<発行日 2022年12月27日>
Vol.33

文京学院大学 オピニオンレター

心理学から見る、令和の若者の結婚観
未婚率の増加が止まらないワケ

<提言者> 永久ひさ子（文京学院大学人間学部心理学科 教授）

心理学が専門。研究テーマは、家族の変化と社会文化的要因の関連（社会文化的変動と結婚・子どもをもつ価値の変化、晩婚化・未婚化・少子化）。日本心理学会、日本発達心理学会、日本家族心理学会、日本心理臨床学会に所属。本学の心理臨床・福祉センター「ほっと」センター長。主な著書に『家族心理学』（共編 保育出版社、2017年）、『人口の心理学へ―少子高齢化社会の命と心―』（共著 ちとせプレス、2016年）、『結婚と家族の心理学』（共著 柏木惠子（編）ミネルヴァ書房、1998年）、『夫と妻の生涯発達心理学―関係性の危機と成熟―』（共著 宇都宮博・神谷哲司（編著）福村出版、2016年）

●はじめに

令和元年の平均初婚年齢は男性31.2歳、女性29.6歳に上昇し「一生結婚するつもりはない」未婚者（18～34歳）の割合は、男性17.3%、女性14.6%と、過去最高に達しています。一方、「いずれ結婚するつもり」の未婚者は減少傾向ながらも、男性81.4%、女性84.3%と依然高い水準にあります。*

恋愛や結婚に積極的ではない男性を指す"草食系男子"という言葉を聞いて久しいですが、いずれの回答にも男女の顕著な差はなく、若者の結婚観をその言葉でくくることには疑問符が付きそうです。とはいえ、「何が何でも結婚したい」と答える若者は減少し「結婚してもしなくても、どちらでもいい」と考える人が増えていると、私自身も学生と接するなかで感じています。いまや、結婚「する」「しない」は個人の選択で、生き方の問題として捉えられるようになっています。

このレターでは、こうした未婚者の結婚観や結婚行動の変化について、私の最新の調査結果をもとに紹介します。

●3つのイメージから探る、若者の結婚観

ことし2月、全国の25～39歳の未婚者960名を対象に、結婚のイメージに関する調査を行いました。その結果、結婚のイメージはプラスの側面である「幸せな生活」、経済的・心理的な制約が生まれるというマイナス面の「自由の制約」、そして、男性は稼ぎ手、女性は家事育児の担い手の責任が期待されるという「性別分業」の3つに分類ができました。

これらを比較したとき、高い平均値を示したのは、「自由の制約」です。

●自分の足で幸せな人生を歩む女性がぶつかる結婚の課題

*"1全く当てはまらない"から"7よく当てはまる"までの7件法で尋ねた

女性は「自由の制約」「性別分業」の平均値が高く、男性以上に、結婚を大変なものととらえています。

また結婚意欲を分析したところ、男女とも、結婚をできればしたい、絶対したいと積極的な人は6割程度で、4割の人は、するつもりはない、したくない、どちらでもいい、と消極的でした。日ごろ学生と接する中での感触を裏付ける結果といえます。

その昔、「適齢期がくれば、結婚するのが当たり前」と考えていた時代には多少のことがあっても「結婚すること」が優先されました。しかし、「する」か「しない」かを選べる時代になると、自分にとってどんな生き方が幸せなのかを、よく考えるようになります。その結果、結婚しても大変さが勝ると考えれば、「どうしても結婚したいほどでもない」と思い至るのは自然なことと言えます。

これまで、人々がこぞって結婚してきたのには、女性にはまともな職が少なく、一人で食べていくのが大変、男性は家事ができないし、家やお墓を継ぐのには子どもが必要だった、という背景があります。しかし現代は、女性もしっかりとした職に就くことができ、経済的に男性に依存する必要がありません。便利な家電製品の登場で家事は簡単、デパ地下やコンビニの登場でご飯も困らなくなると、男女とも結婚の必要性が薄くなったのです。

しかし一方で、結婚生活の中身はあまり変わっていません。イクメンが増えても、子どもの病気で仕事を休むのは女性が多いし、夫の転勤についていくには女性がキャリアを諦めることになります。

"婚活"の言葉の生みの親である、社会学者の山田昌弘先生は、女性の結婚を「生まれ変わるようなもの」と、言います。女性は結婚した相手によって、人生も変わることを指したものですが、私の研究では専門的な仕事に就く女性ほど、「いかに自分の人生を変えずに生きていくか」を重視する傾向にあります。

彼女らは小さい頃から勉強に励み、大学、大学院と進み、資格を取り、現場に出てキャリアを築きます。これを結婚や子育てによって手放したり、中断したりすることは大きな決断です。一方で、専門的な仕事にやりがいを感じていても、かつて子育て専業の母親がやってくれたように、自分も子どもに手をかけて育てたいと考えるなど子育ては変えたくない女性が多いのです。

その妥協点として、「資格を取って、2、3年経験を積んだ後なら子育てで休んでも大丈夫。結婚と子どもはそれから」と考えると、あっという間に30歳近くになってしまいます。

●「結婚によって生き方を縛られたくない」男性は結婚意欲が徐々に低下

女性はどの年代でも結婚に対するイメージは変わらないのですが、男性は年齢が上がるにつれ、「自由の制約」のイメージが強く、「幸せな結婚」のイメージが弱くなり、結婚に対して悲観的になることが明らかになりました。この要因として2つのことが考えられます。

【出典】
*人口統計資料集・2021年・国立社会保障・人口問題研究所

提言者プロフィール

人間学部心理学科 永久ひさ子教授

発達心理学、家族心理学が専門。研究テーマは、家族の変化と社会文化的要因の関連（社会文化的変動と結婚・子どもをもつ価値の変化、晩婚化・未婚化・少子化）。日本心理学会、日本発達心理学会、日本家族心理学会、日本心理臨床学会に所属。本学の心理臨床・福祉センター「ほっと」センター長。主な著書に『家族心理学』（共編 保育出版社、2017 年）、『人口の心理学へ一少子高齢化社会の命と心一』（共著 ちとせプレス、2016 年）、『結婚と家族の心理学』（共著 柏木惠子（編）ミネルヴァ書房、1998 年）、『夫と妻の生涯発達心理学一関係性の危機と成熟一』（共著 宇都宮博・神谷哲司（編著）福村出版、2016 年）